

青年期女子における父娘関係と恋愛イメージ  
—ジェンダー・アイデンティティと適応的依存との関連から

平成 26 年 1 月 20 日

指導教官 井村たかね教授

1000-120703 坂入真奈美

### 問題

女性は父親を通して男性に対するイメージを獲得するといわれている。河合(1980)は、娘にとって父親は内なる男性像のモデルであり、その男性像を発展・変化させる過程を経て、それに呼応する男性を見出し結婚してゆくとした。親が娘に与える影響について、春日(2000)は、父親からの愛情は、女性にとって重要な心理的支えであり、それはつまり自己の存在に対して肯定的な感情を持つための基盤になり、それを支えとして女性は父親との関係の中で自己を形成していくとした。また、青年期においては、恋愛は青年が成長する大事な契機であり、恋愛を通して人間が成長するための重要な経験である(詫間,1973; 加藤,1987)。重要な他者を自ら選択する過程の中で青年は精神的に成長し、そのために恋愛の経験は重要な役割を担うと考えられる。さらに、青年期の恋愛関係は、その後の配偶者選択(新しい家族の形成)のひとつのステップと捉えることができ、人生の大きな選択である結婚についての試行錯誤の過程と考えられる。つまり、父娘関係が異性との親密な関係の構築(恋愛)に対するイメージに影響を与えていたならば、女性の発達において父親との関係は大きな意味のあるものであろう。本研究では、父娘関係の良好さが異性との親密な関係の構築である恋愛に対するイメージに良い影響を与えていたと仮定し、検討を行う。

また、伊藤(1988)は「父親から保護されるイメージが、女性の女性らしさを発展させ、性同一性を獲得するのに重要な条件」と述べている。「父親から自分は愛されている・大切にされている」という自身の性別に対する肯定感によって、自身の女性性が受容できると考えられることから、父娘関係がジェンダー・アイデンティティに与える影響についても検討を行う。しかしながら、Havighust, R.J. や Erickson, E.H. の提唱する発達論において、ジェンダー・アイデンティティと異性との親密な関係はそれぞれ、青年期の課題として同じ段階に位置している。そのため、ジェンダー・アイデンティティと恋愛イメージが、父娘関係に対してどちらが先行して影響を受けるかということについて、検討する。さらに、近年では依存を発達の観点から、適応的な側面を有するものとして捉えるようになっている。田中(2009)は、「依存性の発達や、依存性が成熟したものに変容していくことが自

立に不可欠である」と述べた。誰かに頼りたいと思うのは、良好な互恵的人間関係の構築を前提としているためであると考えられ、互恵的対人関係において、他者に頼り、自分に必要なものを補うことはむしろ適応的であり(竹澤・小玉,2004), 人間としての成熟と捉えるべきであろう。恋愛とは、互恵的対人関係の構築という意味での依存性とも関係があると考えられるため、このことも検討に加えることとした。

本研究における仮説は以下の通りである。①娘が父親との関係を肯定的に捉えている場合、恋愛イメージも肯定的になる。②娘が父親との関係を肯定的に捉えている場合、自身の性別の肯定感が高まっているためにジェンダー・アイデンティティも達成されやすくなる。③恋愛イメージの良好さは、依存欲求の適切さと関連がある。

## 方法

18歳～30歳の女子大学生・大学院生(平均20.04歳, SD=1.62)249名に質問紙調査を実施。娘の心のなかの父娘関係尺度(春日,2005), 恋愛イメージ尺度(金政,2000), 対人依存欲求尺度(竹澤・小玉,2004), ジェンダー・アイデンティティ尺度(佐々木・尾崎,2007)を使用。

## 結果と考察

恋愛イメージとジェンダー・アイデンティティのどちらが先行して父娘関係に影響を受けているかを明らかにし、父娘関係、恋愛イメージ、対人依存欲求、ジェンダー・アイデンティティの各下位尺度の影響関係を検討するため、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、恋愛イメージ尺度「大切・必要」を従属変数にした場合、標準偏回帰係数 $\beta$ が対人依存欲求尺度「情緒的依存欲求」で.34, ジェンダー・アイデンティティ尺度「展望的性同一性」で.31, 娘の心のなかの父娘関係尺度「娘を信頼する父」で.288, 重決定係数( $R^2$ )は.33で、有意な回帰式が得られた。このことから、父娘関係から先行して影響を受けているのはジェンダー・アイデンティティであることが推察され、「大切・必要」は、「情緒的依存欲求」、「展望的性同一性」、「娘を信頼する父」から正の影響を受けていると推察された。次に、重回帰分析で得られたモデルをもとにパス解析を行い、それぞれの因子がどのような影響関係にあるかを検討した。その結果、「娘を信頼する父」、「情緒的依存欲求」、「展望的性同一性」がそれぞれ独立して、「大切・必要」に有意な正の影響を与えていることが分かった( $\chi^2(3)=3.51, n.s.$ , GFI=.99, AGFI=.98, RMSEA=.03)。

この結果から、父親が娘を信頼できており、娘もそのような父親の関わりを受け止められている場合と、他者と情緒的かつ親密な関係を通して自己の安定感を得られている場合、さらに自己の性別での展望性の感覚を持てている場合に、恋愛を自身に必要な経験として

大切に思う気持ちが生まれることが示唆された。春日(2000)は、「日本では父親は娘に対し距離を保った存在である」と述べ、娘から見た父親の「やさしさ」とは、母親的なあたたかさを持つ、見守るような「やさしさ」であると述べた。本研究では、「娘を信頼する父」として、娘との関係性に距離はあるが見守る態度を示しているような父親の関わりが、娘が恋愛を自分に必要な経験として肯定的に捉えることに繋がっていた。春日(2000)は、非行女子を対象とした調査を概観し、父親の「侵入的・過干渉」や「頑固」さなど、娘に強く迫る態度、あるいは娘がそう感じることは、娘にとってプラスにはなっていないと述べ、父親の関わりのあり方が娘に悪影響を与えるケースについて指摘した。父性性の歪み、コントロール性の問題(過剰もしくは欠如)が、娘の精神的健康に負の影響を及ぼしていると考えられる。佐藤(1989)は、「ある種の臨床群において、父親との関係をテーマに治療が進んでいくケースも少なくない」と指摘している。特に異性関係については、女性は異性関係において自分と父親のような関係を繰り返し、父親の愛に飢えた苦い経験を処理しようとする場合がある(Secunda,1994 岡本訳 1997)。このように、女性が異性との良好な関係を持つことと、父親との関係性のあり方は深く関連していると考えられ、女性の恋愛にまつわる問題を扱う際には、父親の存在を考慮することも重要であるといえる。また、「情緒的依存欲求」が「大切・必要」という恋愛イメージに正の影響を与えていていることから、青年期の女性では、他者との情緒的で親密な関係を通して自らの安定を図りたい場合は、恋愛でその欲求を満たす(恋愛が自分に必要なものであると感じる)ことが出来ると捉えていると考えられる。安達(1994)は、「恋人は、自己の安定や親密さの形成にかかわる重要なagentである」と述べた。つまり、他者との情緒的で親密な関係を通して自らの安定を図りたいという欲求が生じた際には、恋愛を自らに必要なものとして捉える傾向がみられ、さらに恋人が依存欲求を充足する対象として機能していると推察され、情緒的対人依存欲求は、自己の安定をもたらす適応的な対人方略として利用されている可能性が考えられる。

しかしながら、「娘を信頼する父」は「展望的性同一性」に影響を与えていなかった。渡邊(2004)や宗内(1989)は、父親との関係性の中で自身の男性性を発達させると述べた。父親との関係性のなかで男性性を獲得することで、自分のなかに「男性の目」を持つことができ、その「男性の目」で自身の女性としてあり方を眺めることで、ジェンダー・アイデンティティを発達させている可能性が考えられる。

青年期女子の発達の様相を捉え、女性の恋愛にまつわる問題を扱う際には父親の存在を考慮することも重要であると示した点において、本研究の意義があると考えられる。